

THE CENTER FOR SHIN BUDDHIST STUDIES 親鸞仏教センター通信

2024年3月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0034 東京都文京区湯島 2-19-11

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp

ホームページ <http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp>

Facebook <https://facebook.com/shinran.bc>

X (旧Twitter) https://twitter.com/shinran_bc

2024.3

第88号

願いと誓い

親鸞仏教センター研究員 徳田 安津樹

「ここにいる者はみな必ず、他者の呼びかけに応じるようになる」

と私は宣言する。教室のなかで、生徒に対して、また私自身に対して。

高校教師としての私は、「倫理」の授業を担当するとき必ず、フランスの哲学者エマニュエル・レヴィナス(1906-1995)を取り上げる。彼の基本概念である「顔」とは、端的には、目の前の他者に応答し責任を負うよう要求するもの、と表現しうる。私が他者を傷つけようとするとき、あるいは苦しむ他者を黙殺するとき、その行為が許されざる罪であることを私に告げる。それが「顔」である。「顔」は、われわれが考える人間関係の一般ルールを根本から覆し、人助けしないことの正当な理由を、自己正当化のために捏造した言い訳として破棄させる。私は、人間は本性上、倫理的な存在、助けを求める他者に応じざるを得ない存在だと考えている。実際、眼前の他者ほどリアルなものなど存在しない。

「だが、」と生徒は問い返す。「本当にそう言えるのか。本当にすべての人が倫理的な存在なのか。助けを求める他者を前にしても、あたかもモノを見ているように、何も感じない人もいないか」。至極まっとうな問いだ。冒頭に掲げた言葉は、これに対する私の答えである。「必ずそうなる」と私は言う。はっきりとした言葉で。

無論、この予言めいた言葉は、答えになっていない。だがどうしても口を衝いて出てしまう。それは、私がそのように願っているからである。実のところ、「人間は倫理的な存在である」という私の主張は、論理的な洞察でも何でもない。「そうである」のではない。「そうではない」かもしれないことも、そもそも私自身が「そうではない」ことの証になっていることも、よくわかっている。だが「そうあってほしい」のだ。「頼むから、そうあってくれ、あなたも私も」と願いながら、私は言葉を発している。

なおかつ、この発話は単なる願い以上のものである。そもそも願うだけなら言う必要がない。それでも声として、かつ定言として発するのは、それが「そうしてみせる」という誓いでもあるからである。発話はみずから、倫理的なコミュニケーションを恐れてはならないという制約を課す。言葉を発したなら、もはや逃れることはできない。逃れるなら、それは私の罪である。だからこの言葉は、願いであり、誓いである。

まさに今これを読んでいるあなたも例外ではない。私はあなたについても、「そうあってほしい」と思っているし、「そうしてみせる」とも思っている。そして何より、本当はあなたも、私とあなた自身に対して、私とまったく同じことを思っているのだと、私は本気で信じている。

時において時を超える

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



当センター所長・本多弘之による連続講座「親鸞思想の解明」では、「本願力回向の行信—『一念多念文意』を読み解く—」と題して、親鸞の『一念多念文意』を拝読している。ここでは、その第8回の一部を紹介する。

(親鸞仏教センター嘱託研究員 越部 良一)

本願成就文には「願生彼国 即得往生 住不退転」(『真宗聖典』534頁、東本願寺出版、以下『聖典』)と、往生を得るところに不退転を得るということも成り立つと説かれています。その住不退転ということを「正定聚のくらいにつきさだまるを、往生をうとはのたまえるなり」(『聖典』535頁)と『一念多念文意』で注釈しておられます。このように本願成就文は、第十八願の成就だけではなく、その内容に第十一願の成就を含んでいる。だから、そのあとに第十一願文、「設我得仏 國中入天 不住定聚 必至滅度者 不取正覚」(『聖典』535頁)、さらに、その成就文をお引きになって、本願成就文を注釈していかれる。そして、「すなわち往生すとのたまえるは、正定聚のくらいにさだまるを、不退転に住すとのたまえるなり」(『聖典』536頁)と、不退転に住する、正定聚の位にさだまることは、往生するという意味であるとして、「このくらいにさだまりぬれば、かならず無上大涅槃にいたるべき身となるがゆえに」(同上)云々と注釈をして来られる。だから、その文の続きのようにして、『聖典』539頁の最後の行に、「『経』(大経)に、「無諸邪聚 及不定聚」というは」と、第十一願成就文の「かの仏国のうちには、もろもろの邪聚および不定聚は、なければなり」(『聖典』536頁)という、邪聚や不定聚がないという言葉がここに出してくるのです。

「即得往生 住不退転」の「即」の字を親鸞聖人は「ときをへず、日をもへだてぬなり」(『聖典』

535頁)と言われます。「時」というのをわれわれは感じて生きていますけれど、その時の中に、今、未来、過去と、時間に三面を感じる。けれどもその三面の中に、本願成就の「時」というのは、常にもう時を超えるような時、時において時を超えるようなものに出会うような時、そういう意味があると親鸞聖人はおっしゃりたい。今は願生するけれども往生するのは死んでからだと、そういうふうに分けて、往生を未来に持って行ってしまって、未だ見ない未来に必ず得るだろうと感ずる、そういう理解の仕方ではない。だから、有限の因縁に苦しめられながら、そこに本願を信じることが成り立つなら、時を超えるような利益をいただく。こういう意味が本願の信心にあるのだと。

こういうことがあって、邪聚や不定聚はないと。「正定聚の人のみ眞実報土にうまればなり」(『聖典』540頁)。正定聚の人のみ生まれているということは、その正定聚ということは報土の利益なのだ。報土の利益をすでに得ていると信ずる。こういう利益を得るとは、「広大の利益をうる」(『聖典』539頁)。無上涅槃の利益を得る。無上涅槃の利益と言っても、我々が求めるような在り方ではなくて、「もとめざるに」えしめ「しらざるに」うる(『聖典』539頁)、そういう利益に会う。有限な変わりゆく命の中に変わらざるものに触れる。変わらざるものに触れるということが持っている意味を何とか表そうとする。われわれは、変わらざるものを、そういうものはどういふものだと考えて得ようとするけれど、それは考えて得られるのではないのだと。本願を信ずるとは、必ず大涅槃を与えずんばやまんという第十一願が成就する、そういう内容が本願成就の中にあるのだ。こういう喜びを親鸞聖人は教えようとなさっているわけです。

意志としての本願 —大拙の浄土教観の 究明に向けて (一)

親鸞仏教センター嘱託研究員 田村 晃徳

これまで英訳『教行信証』研究会では、鈴木大拙により英語に訳された『教行信証』(以下「英訳『教行信証』」)本文を検討してきた。この度、「行巻」まで読み終えたところで、研究会の方針を変更した。今後は、大拙の他の浄土教関連著作なども検討しながら、英訳『教行信証』の重層的な理解を試みる。以下に、研究会の一端を報告する。

■ 訳語の変遷を探る

英訳『教行信証』においては、いくつか特徴的な重要語がある。著名な訳語としては「本願」の訳語であるthe Original Prayer、また「大行」のthe great livingなどが挙げられる。しかし、これらの訳語は大拙の他の著作では用いられていない。それでは、大拙は何故『教行信証』の英訳に際して、それらの言葉を用いたのか。その言葉に至るまでには、どのような訳語の変遷があったのか。そのような点を究明することは、英訳『教行信証』のより深い理解につながると思われる。

検討すべき言葉として『教行信証』の重要語である本願、信心、念仏、浄土、そして涅槃をとりあげる予定である。今回は以下に、「本願」について報告する。

■ 意志としての本願

英訳『教行信証』では本願はthe Original Prayerつまり「prayer 祈り」として訳されている。しかし、本願には他の訳語の候補も存在する。本願の訳語として一般的なものはvow、つまり「誓い」である。事実、大拙も他の著作ではvowを用いており、英訳『教行信証』においても、当初はthe original vow と訳していたことが確認されている。つまり、本願といえば「誓い」として理解されていたのだ。

その一方で、本願の訳語には「意志」がふさわ



しいとも、大拙は考えていた。

この本願について少し話しておかなければなりません。本願は私の解釈では原初の意志です。そしてこの原初の意志があらゆる存在の根底にあるのです。(鈴木大拙『真宗入門』佐藤平訳 13頁)

この文章は、大拙がニューヨークのアメリカン・ブディスト・アカデミーにおいて英語で真宗を語ったものである。注目すべきは、この“INFINITE LIGHT”と題された講演が行なわれたのが1958年であることだ。これは大拙が大谷派の宗務総長から英訳『教行信証』を依頼された2年後にあたる。これを見れば英訳『教行信証』制作中に大拙が本願をどのように考えていたのかがよく分かる。本願とは「如来の意志としての願い」であるという理解が強くあったのである。

■ 祈りである意志

大拙の「意志としての本願」という理解は、英訳『教行信証』執筆時にも強く残っていた。実際、英訳『教行信証』序文には、absolute prayerful willとして本願が説明されている。これは「絶対的な祈りの意志」と訳せるであろう。大拙がprayer、つまり「祈り」として本願を訳したことはよく知られているが、どのような意味を込めていたのかは、案外知られていない。それは「祈り」という言葉から想像できるような、静かに跪いている姿勢ではない。衆生救済という如来の本願は、祈りに裏付けられた、強い意志としてあったのだ。

上記のように、英訳『教行信証』の理解は、大拙の浄土教理解を踏まえる時に、より深まる。当面は大拙の浄土教観のさらなる究明に向け、『浄土系思想論』など、初期の文献も用いつつ、研究会を進めていく。

近現代『教行信証』研究

検証プロジェクト外部講師招聘研究会

近世真宗教学の課題 —特に成立期を中心として—

三浦 真証 氏（龍谷大学非常勤講師）

2023年8月24日、龍谷大学非常勤講師の三浦真証氏をお招きし、「近世真宗教学の課題—特に成立期を中心として—」というテーマのもと、研究会を開催した。

近世の大谷派の学僧が『教行信証』を講義する際、繰り返し参照した著作の1つに、本願寺派・智暹の『教行信証文類樹心録』がある。しかし、智暹の教学的背景の研究には、未だ十分でない一面が見られる。そこで今回の研究会では、近世初期の本願寺派教学に精通する三浦真証氏に、智暹が登場する以前の本願寺派教学の課題について、特に西吟と知空の教学を中心に、問題提起をしていただいた。ここに、その一端を報告する。

1、本願寺派における近世教学の流れ

江戸時代になりまして、幕府は仏教界に学問の奨励を求めました。そういった中で、たとえば浄土宗の十八檀林など、いろいろな宗派で学問機関が設立されます。そして本願寺派でも、寛永十六（1639）年に、学寮という僧侶養成の学問機関が設置されました。学寮のトップは能化と呼ばれ、全部で8人おりました。准玄、西吟、知空、若霖、法霖、義教、功存、智洞です。しかし、功存の『願生帰命弁』が火種となって「三業惑乱」と呼ばれる論争が起こり、智洞の代に能化の説の方が誤りであるという判決となりました。その結果、能化制度自体が廃止され、年預勧学という制度に変わっていきま

以上が本願寺派の近世宗学史の大まかな流れと



なりますが、今回の講義では特に、初期の能化である西吟と知空について、お話をしてまいります。

2、教学成立期の論争「承応の鬨牆」

西吟が能化の時代に、「承応の鬨牆」という論争が起きました。西吟の講義について、肥後の月感という人物が、「西吟は自性の真如を見つめて悟るとする理観や、空の思想に偏った異義である」と本願寺に訴えます。これを受けて、西吟と月感との間で、数度のやりとりがありました。この論争では、様々な点が問題になっておりますが、今回は特に①「口伝教学」と、②「自性理観」を中心にお話ししたいと思います。

まず①ですが、月感は西吟の教学を、口伝を軽視するものだと批判しています。これに対して西吟は、口伝を受けることは大事だと言うのですが、一方で、口伝を権威化するだけで、きちんと仏教全体の教義を学ばない人を批判しています。ここから当時、口伝を権威化する真宗のあり方があり、それを西吟は批判しつつ、新たな教学のあり方を目指していたと想像できるのです。

では、西吟が目指した新しい教学とは、どのようなものだったのでしょうか。ここで問題になるのが、②の「自性理観」です。月感は、「西吟は講義の中で、自分の本性が仏であるという生仏不二の話ばかりをしており、浄土真宗の安心の話は全くしていない」と批判しています。「理と事の両面を踏まえる」ことは、西吟の教学姿勢の特徴になります。簡単に言うと、理は生仏不二の世界、事は生仏而二の世界です。そして、西吟は上記の月感の批判には、「生仏不二を否定したら大乘仏

教ではない」と反論するのです。ただ、真宗は、理を悟って往生する教えではない、とも言っています。ですから、理事の両面を語るのは、仏教を学問的に論じる場合のことになります。他宗派からの批判に応答し、仏教全体の中に真宗を位置づけるためには、理事の両面を踏まえた語りが必要であると、西吟は考えていたのだと思います。

ただ、西吟は、念仏をしていく上においても理としての仏性のはたらきを認めており、この点は行き過ぎた解釈だと私は思います。自分の中に仏性がある、それが何らかのはたらきを為して、私たちは悟っていくのだという言い方は、真宗教義としては少し行き過ぎているのではないかと思います。

また、近世は出版の時代であり、仏教典籍も数多く出版されておりました。そして、西吟当時の学寮では、最新の出版物をテキストとして利用する雰囲気がありました。西吟は執筆、あるいは講義の際には、聖道系の出版物を意識して利用しております。それは、新たな真宗教学を確立する際の論拠を明確にし、他宗の僧侶から見られても正当性・論理性を主張できるものへの変革を目指すものだったと考えられます。言い換えれば、真宗教学の真実性を、出版物という客観的証拠によって担保しようとしていたのでしょう。

3、第二代能化知空の活動

貞享三（1686）年に、西本願寺第十四世である寂如上人が、『教行信証』の伝授を行いました。これは、「寂如御講義」と呼ばれております。この伝授の補佐をしたのが、第二代能化となる知空でした。この「寂如御講義」において、出席者が使っていたのは伝統的な書写本ではなく、当時の書店から出版された刊本でした。また、この伝授においては、『教行信証』の引用文を原典に合わせて訂正したり、宗祖の特殊な読みを当面読みで訂正したりするなど、驚くべきことが行われていました。そして、この「寂如御講義」の下準備をしたのは、知空であったと考えられます。本願寺

において、伝統的に教学を担ってきたのは御堂衆であり、口伝を伝える相伝家の人々でした。しかし、寂如と知空は、当時出版されていた『教行信証』を使い、伝統的な読み方ではなく、当時の仏教典籍の読み方に合わせた学問というものを考えていきます。つまり、この「寂如御講義」は、近世という時代に合った新たな学問を構築しようとする象徴的な出来事だったのではないかと思います。

おわりに

近世の初期に学寮を牽引した西吟や知空は、客観的で批判に耐え得る真宗教学の構築を目指したのでしょうか。彼らが行ったことは、真宗教義としては問題となる点もあるものでしたが、それは口伝を重視する伝統的な教学から脱却し、近世という時代に合った新しい教学を構築しようとする営みであったように感じます。

このように近世初期教学を位置づけた時、われわれが考えるべきことは、正しい真宗学とは何か、ではないでしょうか。仏教としての真宗という視点——これは、西吟、知空が重視したことでした——と、真宗の独自性を強調するという視点。私は、近世という時代は、そのバランスをどのようにとるかという問題を巡る、学僧たちの営みであったのではないかと考えています。

※本研究会は、青柳英司を研究代表者とするJSPS 科研費20K12810による研究の一部として開催されたものである。



信見敬得大慶 即横超截五悪趣」文

「本願名号正定業」というのは、選択本願の行というなり。「至心信楽願為因」というのは、弥陀如来回向の眞実信心なり。この信心を阿耨菩提の因とすべしとなり。「成等覚証大涅槃」というのは、成等覚というは、正定聚のくらいなり。このくらいを龍樹菩薩は、「即時入必定」とのたまえり。曇鸞和尚は、「入正定之数」とおしえたまえり。これはすなわち、弥勒のくらいとひとしとなり。証大涅槃ともうすは、「必至滅度の願成就」のゆえに、かならず大般涅槃をさとるとしるべし。滅度ともうすは、大涅槃なり。

《訳註》

選択本願の行…「選択本願」とは、阿弥陀如来が因位の法蔵菩薩の時に選択した、一切の苦惱する衆生を「我が国・阿弥陀の浄土に撰取して救おうという根本的な願ひ」。「選択本願の行」とは、如来がその願ひを実現するため、阿弥陀の浄土に一切の衆生を平等に往生させる行として選び取り、我々衆生に至り届ける名号・南無阿弥陀仏、すなわち称名念仏の一行を指す。親鸞は、「大無量寿経」の第十七願「諸仏称名の願」を「選択本願の行」と見定めている。

現代語化をめぐる

この始まりの部分のキーワードである「涅槃」という方について、通常の仏教では、「入涅槃」のように「仏陀が涅槃に入る」あるいは「衆生がさとりの方へ向かう」というとらえ方をするように思われる。一方親鸞は、冒頭に掲げた銘文に「不断煩惱得涅槃」とあるように「衆生が凡夫であるままに涅槃を得る」というとらえ方をしている。そこには、「涅槃」ということの方から、こちら側に向かってはたらきかけてくるものを得るといった理解があり、そのベクトルで「涅槃」を表現しているように思われる。

また親鸞は、「涅槃の眞因はただ信心をもつてす」(『聖典』一三三頁)と記している。信心こそが「涅槃」の眞実の因であるという。つまり、本願の名号・南無阿弥陀仏をいたたく眞実信心という因によって、無上大涅槃という果を得るととらえているのだと思われる。如来の本願に帰依する、この立位置が重要なのであろう。

親鸞はこの銘文の解説で、「証大涅槃」は「かならず大般涅槃をさとの」と同義であると押さえている。問題は、その「証」という一語をどうとらえるかである。親鸞は、「教

である。「成等覚証大涅槃」というのは、「成等覚」とは、正しく仏に成ることが定まった者のあつまりという位である。この位について龍樹菩薩は、「即時入必定(即の時、必定に入る)」、即ち往生を得るその時、必ず仏に成ることが定まった位に入るとおっしゃっている。曇鸞和尚は、「入正定之数(正定の数に入る)」、正しく仏に成ることが定まった者たちの数に入ると教えてくださっている。これはすなわち、弥勒菩薩がついている位と等しいということである。「証大涅槃」と申すのは、『仏説無量寿経』の「必至滅度の願(第十一願)成就」のゆえに、つまり、「阿弥陀如来の本願成就の浄土に生まれると、皆ことごとく、正しく仏に成ることが定まった者のあつまりに住する」。それゆえに、必ず仏の大いなる完全な涅槃というさを体得すると知っておくべきである。ここで「滅度」と申すのは、「大涅槃」のことである。

行信証「行巻」にある「当に無上菩提の因を証すべし」(『聖典』一五八頁)という文の「証」について、「証字(中略)験也」(『聖典』一〇三頁)と注釈している。その「験」とは現代の言葉でいう、実験、体験の「験」である。要するに、「証」は「さとの」とは、「知的に対象的に知る」のみならず、「身体的に体験的に受けとめる」という意になるのではないだろうか。よって、その現代語化にあたって、「体得する」という言葉を選んだのである。

問題提起

『尊号真像銘文』の最後に、親鸞は、自らが製作した『正信念仏偈』から二十句の文を選び、『正信偈』の銘文として冒頭に掲げ、親鸞自身による解説をもって、その全体を結んでいる。この「本願名号正定業」に始まる二十句は、親鸞が、『正信偈』の中でも特に信心の問題を強調した部分を抜き出したものだと思う。つまり、「尊号」すなわち「本願名号」をいたたく真実信心の中心課題は、この部分にあるということなのだろう。今号では、そのはじめの四句を解説した部分に焦点を当ててみる。

親鸞はまず、「本願名号正定業」とは「選択本願の行」である、と押さえている。これは、どいうことなのだろうか。そもそも「正定業」という言葉は、善導・源空（法然の伝統の中で打ち立てられてきた言葉である。その「正定業」の了解は、「如来が正しく定めた、衆生の側の阿弥陀の浄土に往生する業」、すなわち仏の名を称する、称名念仏であるという文脈になると思われる。一方親鸞は、そ

ういう文脈を踏まえつつ、『尊号真像銘文』の『選択集』の銘文において、「正定之業者即称名号」を「正定の業因は、すなわちこれ仏名をとらなるなり。正定の因といふは、かならず無上涅槃のさとりをひらくたねともつすなり」（東本願寺出版『真宗聖典』以下、『聖典』、五二七〜五二八頁）と解説する。つまり親鸞は、「正定業」という言葉を「無上涅槃のさとりをひらく業」、衆生の側の阿弥陀の浄土に生まれて必ず仏に成る業」という射程でとらえていると見ることが出来る。

そうすると、この親鸞の解説の始まりの一文は、本願の名号は、一切の苦悩する衆生が必ず仏に成ることを成り立たせる業である。また、阿弥陀如来の選択本願の行は、要するに、そういう成仏を成り立たせる行である、ということを示す文だと言える。なぜ、そう言えるのか。それは親鸞が「諸仏称名の願」を「選択本願の行」として確かめているからである（『聖典』一五八頁）。つまり、「選択本願

の行」のところに「諸仏の称名」が成り立っている。諸仏が存在しているところにおいて初めて、衆生が諸仏に成るということが言える。そこに「一切衆生の成仏ということが保証され、明確なものになると考えるのである。

その始まりの一文の内実を尋ねるに、本願の名号・南無阿弥陀仏が衆生の「正定業」であるというのは、突き詰めると、如来の「選択本願の行」というところに極まる。すなわち、如来に根拠があるという意を表現しているのだと思われる。要するに、本願の名号は、こちらが「自己」中心的な思いを満たすために、称えるというよつなものである。それは、阿弥陀如来の選択であり、本願を実現する行は、たつきである。親鸞は、自身の『正信偈』の銘文の解説のはじめに、そのような位置づけがあることを強調して、本願の名号・南無阿弥陀仏のいわれをきちんといただいでいくよつ勧めてくださっているのだ、と受け取りたい。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 菊池弘宣）

【原文】

和朝愚禿釈の親鸞が『正信偈』の文

「本願名号正定業 至信心樂願為因 成等覺証大涅槃 必至滅度願成就 如来所以興出世 唯説弥陀本願海 五濁惡時群生海 応信如来如実言 能発一念喜愛心 不断煩惱得涅槃 凡聖逆誘齊回入 如来水入海一味 撰取心光常照護 已能雖破 無明闇 貪愛瞋憎之雲霧 常覆真实信心天 譬如日光覆雲霧 雲霧之下明無闇 獲

【現代語】

「和国」の愚禿釈の親鸞の『正信偈』の文 ※銘文の全文は省略する。

「本願名号正定業」というのは、つまり、阿弥陀如来が選択した「一切の苦悩する衆生を救おう」という本願を実現する行だということである。「至信心樂願為因」というのは、阿弥陀如来のはたらきが至り届いた真実信心である。この信心を仏のこの上ない菩提というさとり因とすべきだとい

「近現代の真宗をめぐる人々」第21回 (東井義雄 [1912~1991])

京都と兵庫の境をなす丹後山地、その比較的なだらかな山間に、小寺がひっそりと佇んでいる。浄土真宗本願寺派東光寺である。東井はそこで長男として生まれた。豊岡尋常高等小学校や、母校の合橋村立相田小学校などに着任し、後者では校長も務めた。教師としての彼は、「生活綴方」の重要な実践者としてその名を残している。

生活綴方とは、生活の生きた現実や、そのなかで感じたこと・考えたことを自分の言葉でありのままに書かせ、それを教師と学級で読み合うことを通して、生活・社会への認識や思考を深め、広げさせるという日本独自の教育法である。1920年代末から50年代にかけて展開し、戦時下では左傾運動として弾圧を受けた。東井は、「ほんとうの学力」が育つためには「教科の論理」だけでなく「生活の論理」が必要との確信から（小4生モリタミツの逸話を見よ）、生徒の「くらし」に根ざした教育法を絶えざる実践のなかで探究し、綴方教育に深くのめり込んでいった。日本教育史に刻まれた『村を育てる学力』（1957年）は、その実りである。「書くこと」に自己の確立と共同性の回復の端緒を見いだす東井の洞察が正しかったのは、思うに、「書くこと」は、表面に現れない人間の底にあるものを、協同的に汲み上げるからであろう。

東井は、親鸞の偈によりながら、仏であれ人であれ、それが「凡・聖・逆・謗」を齊しく抱きとる者であるかどうか「ほんもの」と「にせもの」とを見分ける基準だと述べる。だが、学習につまずく者、半端な知識をもって思いあがる者、教師に背を向ける者、それどころか謗りさえする者をも平等にすくい上げる教育とは、なんと難しいものであるか。東井の実践は、秩序を正すことを最大の関心事とし、しかもそれを罰をもって成し遂げようとするきらいのある現代社会を、土の香る教室のなかから、いまなお挑発し続けている。

(徳田 安津樹)

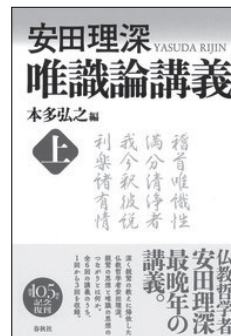


『東井義雄著作集7』（明治四書出版、1978年）口絵より

お知らせ

■出版情報

- 本多弘之編『安田理深 唯識論講義』上・下【新装版】（春秋社、2023年10月発行）



■受賞

- 宮部峻「宗教のリアリティを捉える——ロバート・ベラーの「象徴的実在論」の理論的意義」（日本社会学理論学会第18回大会、2023年9月3日）【第1回日本社会学理論学会奨励賞（大会報告）】

■研究発表

- 青柳英司「隆寛の『弥陀本願義』について」（第29回真宗大谷派教学大会、2023年7月2日）
- 中村玲太「善導『観経疏』「念々不捨者」が与えた法然門下への波紋」（同上）
- 藤原智「親鸞『教行信証』における真実証——「必至滅度」についての深励の議論を手がかりに」（同上）
- 長谷川琢哉「円了センター30年の歩みと三浦節夫の井上円了研究」（於三浦節夫先生追悼シンポジウム、2023年7月8日）
- 青柳英司「智暹の真宗教学理解」（於日本印度学仏教学会第74回学術大会、2023年9月2日）
- 中村玲太「法然門下における善導『観経疏』の「一願言」をめぐる伝承と議論」（同上）
- 飯島孝良「山東京伝における一休像—近世文藝の「禅」イメージ形成—」（日本宗教学会第82回学術大会、2023年9月10日）
- 大胡高輝「親鸞の思考の基底をめぐる——「現世」と「超越」のイメージから」（於日本倫理学会第74回大会、2023年9月30日）
- 大胡高輝「親鸞における臨終来迎・再考——第十九願をめぐる思考から」（日本思想史学会2023年度大会、第9回「思想史の対話」研究会、2023年11月12日）
- 古畑侑亮「明治初期における「好古家」の蒐集活動と中世史研究—編纂物と書簡の分析から見えるもの—」（於日本史研究会12月例会、2023年12月10日）